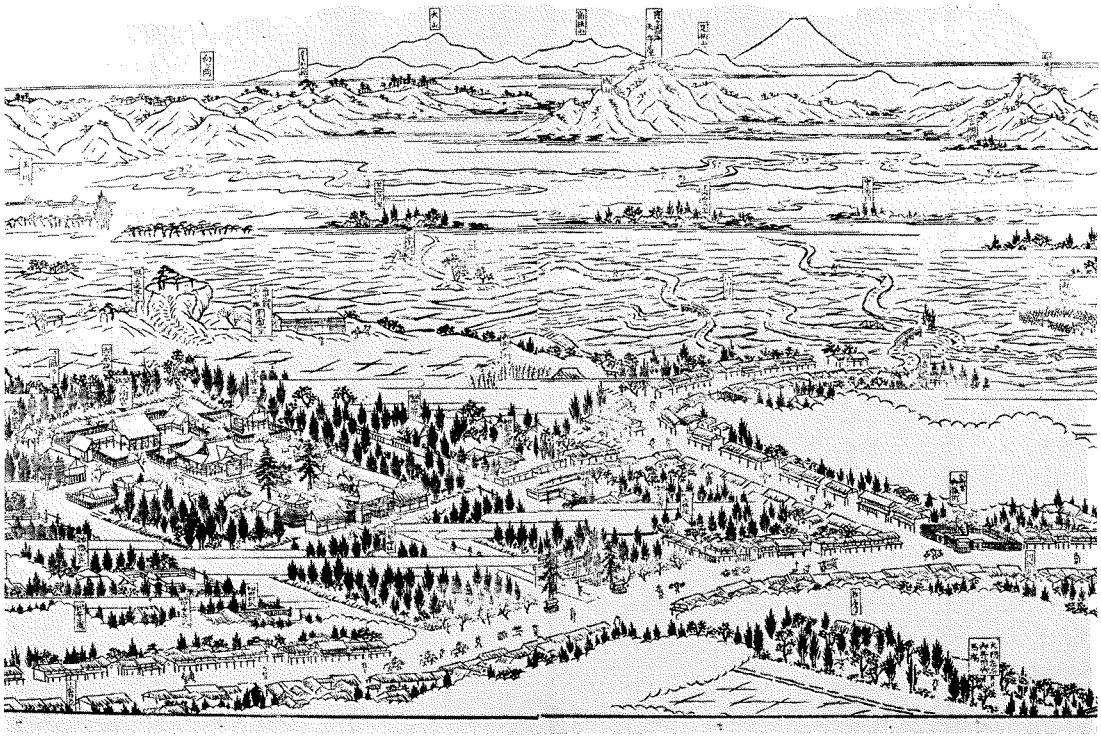
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

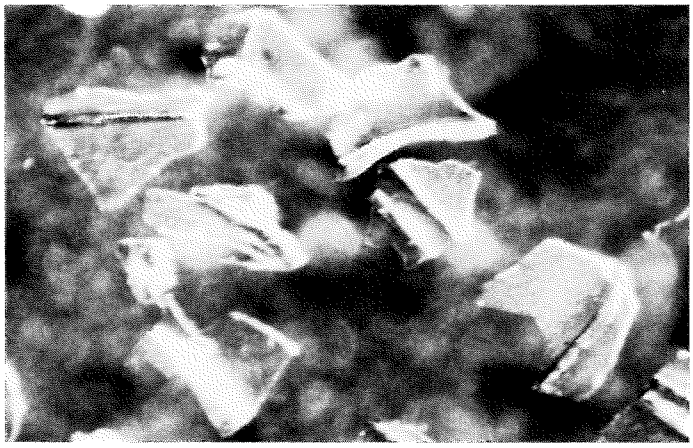
府中市郷土の森だより　No.6　al museo



武蔵府中国府台勝概一覧図

木版刷単色　江戸末期　永年田好写
当時国庁跡と考えられていた国府台（通称御殿山　府中本町駅東側）を中心とする俯瞰図です。その描写は細密で、六所宮（現大国魂神社）の社殿や神官の家々の配置、記された地名など情報の多い図です。

一枚の地層フィルム
～常設展示「府中のおいたち」～



始良Tn火山灰の顕微鏡写真

府中市博物館の常設展示「府中のおいたち」では、展示室壁面に４枚の地層フイルム標本が展示されています。いずれも地質時代における府中市周辺のおいたちの各時期を示したものですが、うち１枚は今回新たに追加したものです。

地層フイルムは、崖や地表から深掘した地層断面を採取したもので展示分野だけでなく、

（１）野外で採集される自然標本と同様に、あるいは時間的に限られた野外調査では、地層フイルムそのものが野外調査と室内分析を結びつけるものとして「原位置再生」の役割を果たしています。

（２）また地形・地質は、現地で保存することがほとんど困難な状況にあります。とくに都市部では市街地が拡大し、建設工事や造成工事など地形の人為的改変の中で地形・地質学的に貴重な地質断面の多くは失われる傾向にあります。その意味で地層フイルムは、地形や地質断面の一部とはいえ、将来に残すべき保存資料です。

府中市天神町の地層フイルム

今回、新たに追加展示された地層フイルムは、立川段丘（Ｔｃ面）に位置する府中市天神町の調査地で採取したものです。調査地の地表形態は平坦面と緩斜面（かんしゃめん）が見られます。この緩斜面下には帯状の凹地（くぼち）が埋没しており、緩斜面の地層断面を採取した地層フイルムからは次のことが分かります。

（１）立川礫層（れきそう）が古多摩川によって下刻され、立川礫層の頂面は約30度の傾斜をもつかのように、凹地底部に続いています。凹地は古多摩川の流路跡であり、この時期（3.5～３万年前）の古多摩川は、立川段丘群の中で最も古い河成（かせい）段丘であるＴｃ１面を形成していました。

（２）Ｔｃ１面では、立川礫層の上に立川ローム層（赤土）をのせています。地層フイルムでは、斜面部で立川ローム層のほぼ全層がみられ、凹地底部になると立川ローム層の下部が欠如しています。ローム層の一部欠如は、古多摩川の流路変遷（離水）以降に立川礫層からの湧水によって流失したものです。

（３）湧水の消滅後、凹地は立川ローム層の上部、黒土層によって埋積されています。その厚さは、平坦部と比較して厚く堆積して地表である緩斜面を形成しました。もともと立川ローム層は、おもに古富士火山の噴火による火山灰が降灰し土壌化したもので、凹地底部では降灰した火山灰が風雨によって拡散することなく、よく保存されています。

地層フイルムでは、武蔵野台地の平坦部では見られないスコリア密集層やＡＴ（始良（あいら）Ｔｎ火山灰）の純層が見られます。ＡＴは、2.2～2.1万年前に九州・鹿児島湾の始良カルデラから噴出し、日本列島をほぼ覆（おお）いつくした火山灰です。

府中市天神町の地層フイルムは、府中のおいたちの一時期である段丘形成から地表形成までの特徴を示しています。　（M）

民俗入門講座 その2

民具の整理1

前号では民俗資料の概念と、民俗資料の収集について述べました。資料の収集には、寄贈・寄託・採集・作製・購入などいろいろな形がありますが、これら受入れた資料を博物館でどのように整理しているのか、今回と次回の2回に分けて紹介してみます。

＝民具の水洗い＝

民俗担当の学芸員は民俗資料を収集します。そして民具と対話しますが、まずその第一の対話の場は、資料の材質にもよりますが、民具の水洗いといえるでしょう。受入れた民具は、ほとんどが泥やほこりで汚れています。水洗いをすることによって、その民具の出生、使用時のことがわかる銘などが見出されます。

まず製造元を示す商標やラベルを見つけます。足踏み式回転脱穀機を例にとってみますと、当館では府中・鳥取・川越・川崎産のものを所蔵しています。足踏み式回転脱穀機は大正時代から登場したものですが、それまでの脱穀具＝千歯抜きの一大生産地であった鳥取でも、千歯抜きから足踏み式への大きな転換期があったものと想像されます。また川越は近世以降江戸への穀物の集散地として繁栄した所で、そこに足踏み式の生産地としての土壌が培われていたものでしょう。ここで府中と川越の地理的な位置を考えてみますと、明治後半からの川越・国分寺間（現西武線）、国分寺・府中間（現ＪＲ線）の鉄道敷設があります。これら鉄道敷設により、それまでの行商形態から、鉄道輸送による店舗販売への転換の一構図が浮かびあがってくるようです。

またある時、墨で書かれた文字（墨書銘）を発見します。この墨書には所有者を示すもの、購入年月日を示すものが多く「明治○○年○月吉日購入、○○○○氏用具」などと書かれることが多いようです。農具では唐箕や万石とおし、など大型のものによくみられます。ここで1点万石とおしの墨書の例を紹介しましょう。

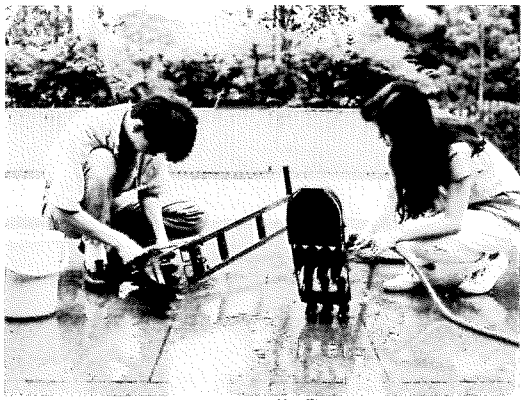
明治廿九年十一月十三日求之
東京府下北多摩郡多磨村常久　関田近知
北多摩郡府中町吉村屋二於テ買ヒ
壱七五買売

郷土の森に移築復原されている旧島田家住宅は、天保年間から新宿（現宮町）で薬種業を営んでいましたが、屋号を「金物吉村」と称し、昭和3年まで金物も扱っていました。この万石とおしは島田家で明治29年、当時のお金で1円75銭で購入したことがわかります。このように墨書ひとつから、資料をとりまく巾広い環境が浮かびあがってくるのです。これら農具は、当時としては高価なものでした。墨書は農具を大切にするというひとつの現れでしょうし、購入の日がハレの日であったに違いありません。

また墨書の他に焼印があります。赤々と燃えている火種の中に焼ゴテを挿し入れ、しばらくしてとり出し、木部に押しつけるのです。ジュという音と煙がでます。これも所有者を示すものが多いようです。

今回は博物館民俗担当の資料整理の第一歩、水洗いについて書きました。そして水洗いが、調査研究の第一歩でもあることも紹介しました。

（G）



水洗い作業

都市化と帰化植物

中村武史

近年来の都市化により東京の自然破壊は進行を続け、約45年前、人口が500万人台の頃には都内の5分の4が緑におおわれていたにもかかわらず、昭和37年頃には3分の2に減少し、44年では37年の約半分に激減するという事態に及びました（東京都公害局調査）。さらに、昭和49年になると区部では緑がほとんど残っておらず、都会はビル、住宅、工場で埋め尽くされ、コンクリート、アスファルトなどで舗装された道路が網の目ように走り、植物の入り込む余地など全くといっていい程なくなってしまいました。この様な状況は東京以外の地域でも同様の現象になってきています。こうした都会の発展過程には、国際交流の進展や、それに伴う交通量の拡大があったことはいうまでもありません。しかし、こうした海外からの出入りがさかんになってきた戦後の都市周辺、市街地には、それまで国内では見られなかった数多くの植物が急増し始めました。わずかに、広い道路の両側に街路樹が植えられているだけの区域に未知の植物が侵入してきたのです。

こうした植物は帰化植物と名付けられています。文字通り外国から侵入して野生化したものですが、『原色帰化植物図鑑』（長田武正1976）には「自然の営力によらず、人為的営力によって意識的または無意識的に移入された外来植物が野生の状態で見出されるものをいう。」と記されています。加えて時代で分けると、江戸時代末期から明治・大正・昭和にかけて渡来し、野生化した植物を帰化植物として扱っています。それ以外のいわゆる「雑草」と呼ばれる植物も、かつて外国から来たものが多く、広い意味ではやはり帰化植物になります。ただしこれらはイネ、ムギの栽培に伴って弥生・大和・奈良・平安時代等に渡来したもので、史前帰化植物と呼ばれています。

さて、この帰化植物の侵入度合を、代表的なタンポポの例でみてみます。1980～82年の調査では、東京圏におけるタンポポは、川崎、千葉、埼玉などの周辺地域を含めたどの調査区でもカントウタンポポが独占しているところはなく、むしろセイヨウタンポポが主に占めていたと報告されています。また、セイヨウタンポポだけが生育する区画が東京湾周辺に集中し、川崎・千葉へ連続的に拡張していることもわかっています（小川・本谷調査）。このようにタンポポひとつをとっても、外来種の侵入経路は明確であり、また生育数の多さに驚かされます。

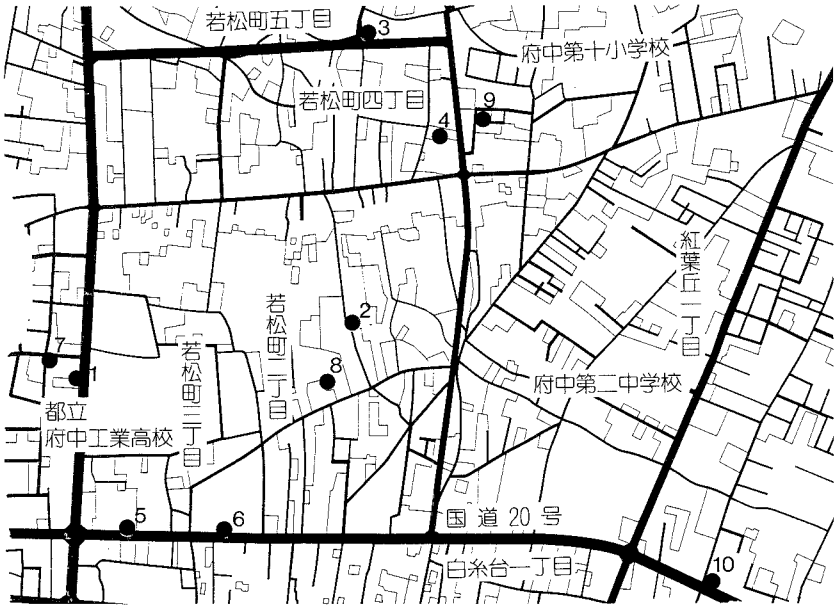
昨今、世界各国から多くの帰化植物が移入してきますが、セイヨウタンポポのように定着していくものはほんのわずかです。仮着しても子孫を残せずに、大部分の種類が消滅していきます。限られた定着できる植物は、我が国に昔から生育していた植物では埋めきれないところで生活できる種類です。埋立地や、ビルを壊した跡の空地といった、都市化によって新たに生じる環境が広がるにつれて帰化植物が目立ってくるゆえんなのです。そのため、帰化植物の入り込む割合がその地域の都市化の指標となります。つまり、帰化植物の数が多い程、都市化は進行しているというわけです。

それでは府中市域で考えてみます。府中市では自然調査が続けられてきた12年間に148種類の帰化、及び外国産野生植物が記録されています。しかし府中市自然調査の報告では、市域で記録された帰化植物のうち、その33.8%にあたる50種は明らかに増加しているという結果を出しています。最も多く帰化植物が入り込んでいるのは多摩川で、輸入された大豆、小麦などに混ってきたものが、精製時にゴミと共にすてられ漂着したと思われます。特にクワモドキやアレチウリ、造成地の緑化のために持ち込まれて帰化したネズミムギ、オニウシノケグサなどが目立っています。また、園芸品として入ってきたものが野生化したキショウブ、イヌキクイモ、セイタカアワダチソウなどもポピュラーな植物で

しょう。これらは、河川の汚れが土地を富栄養化したり、造成工事により洪水などの増水が少なくなったため、環境に変化が生じた結果といえるでしょう。

では、市街地ではどのような場所に多く入り込んでいるでしょうか。当博物館で行われた調査の一例を紹介することにします。郷土の森が開設する前年度、1986年9月に市内の帰化植物調査を行いました。若松町付近を中心とした市の東部に10か所を選び(A図)、1m平方区画ごとに帰化植物の個体数、種類数を数え、全部の個体数から割合を引き出したものです。方形区は、自然状態に近い草原や屋敷林、確実に人の手が入り込んでいる植栽地、梅園などです。こうした環境のちがいで帰化植物がどのような割合で入っているかは、非常に注目されるところでした。B表はその調査結果をまとめたものです。これから見てもわかるように、自然状態で残されているところでは帰化植物の侵入は少なく、逆に他の地域から土や植物を持ち込んで造ったような場所では、比較的高い割合でみられます。特に路傍の空地や梅林のような肥沃なところでは顕著な値を示しています。

このような生態学的立場で扱った報告では同様に千葉県市川市で調査された記録があります(沼田・大野調査)。市街地、住宅地、台地住宅地、台地畑地、水田、河原、台地草原、林地と調査地を分けて、それぞれ一定の範囲に入る全植物



A図 調査地点略図

St.No.	立地(環境)	総個体	在来個体	帰化個体	個帰化率	総種数	帰化種数	種帰化率
1	駐車場の踏跡	14	14	0	0.00	2	0	0.0
2	公園前のよく耕された畑	175	174	1	0.57	5	1	20.0
3	三井グラウンド前の空地	189	178	11	5.82	17	5	29.4
4	ケヤキ・シラカシ屋敷林	50	47	3	6.00	15	3	20.0
5	ススキ・チガヤ草原	667	610	57	8.55	18	5	27.8
6	国道20号並木の植マス	117	98	19	16.24	13	5	38.5
7	駐車場の石壁のふち	36	26	10	27.78	4	1	25.0
8	児童公園内の新しい植栽地	991	689	302	30.47	18	4	22.2
9	富栄養な梅林の林床	255	47	208	81.57	19	3	15.8
10	国道20号の荒れたのり面	262	35	227	86.64	8	4	50.0

B表 調査地点における帰化植物の侵入度

のうちで割合を出しています。この結果でも、人為が加わらない草原や林地などのように安定した環境のもとでは、すでに在来の多年生植物によって占められているため、帰化植物はほとんど侵入していません。一方、住宅地、市街地では帰化植物の割合は多いと報告されています。また、不安定な空地や二次的植生地で何故多いのかは、先に触れたように帰化植物が侵入できる余地があることはもちろん、生活型の上で同格の一年生である在来植物に対抗して帰化植物が生活できるからとも指摘しています。

先述のとおり、府中市内の帰化植物は年々増加の途をたどっています。武蔵野地域全体の総数でも昭和28年の214種から、12年後で276種に増加しています。これは武蔵野一帯での全植物数の11%を占める値です。今後も都市化が続く限り、常に上昇の数値を占めていくことが十分に予想できる状況です。

近来、帰化植物については、オオブタクサによる花粉症やセイタカアワダチソウの休耕地荒しなどが新聞、テレビでも騒がれ、社会問題としても話題になっています。さらには広く動物も含めた帰化生物全体でも、侵略や錯乱といった現象が起こるために、どうしても悪いイメージにとらえられがちです。しかし、これらの帰化植物は都市化された場所、すなわち在来種が入りにくいところで生態的空間を埋めあわせてくれる植物と考えることもできます。どうしても緑の乏しくなりがちな都市をいち早く緑で埋めてくれるということを見るならば、そう一方的に悪者扱いすることが出来ないかもしれません。いずれにしても、文明の発達と自然破壊は切っても切れない縁のようです。そうした中で新たに入ってきた緑の仲間として、もう一度帰化植物を見つめなおしてみてはいかがでしょうか。

最後に、当博物館の帰化植物調査、並びに本文のまとめにあたり、指導、協力をお願いした府中市自然調査団の曽根伸典先生にこの場をかりて厚くお礼申しあげます。

＝最近の発掘調査から＝

昨年12月、ひさびさに府中の遺跡が、新聞紙上をにぎわしました。ご存じと思いますが、国府の中心、国庁にかかわると考えられる建物群（図面ではＳＢという記号で示してあり、小さな丸は建物の柱穴を、それを結ぶ線は建物の想定できる範囲を示しています）が見つかったからです。そこで今回は、新聞記事では分かりにくかったこの調査について概説してみましょう。

国府について、分かりやすく説明しますと、当時の国は今でいう都道府県に当たり、府中は武蔵国の県庁所在地となるわけです。そして、この例に当てはめますと、県議会と知事室を合わせたようなものが「国庁」、その他の県庁舎部分に当たるのが「国衙（こくが）」、そしてここに勤める役人の宅地部分が「国府」となります。これには諸説がありますが、一応ここではこういい分けておきます。そして、今回見つかったものは、いままでの竪穴住居址を中心とする調査地区で

調査地区 航空写真

はない（図面に見る竪穴住居址＝ＳＩは国府以前のものです）ことから、宅地部分＝国府でなく、国庁か国衙ではなかろうかと言う結論が導き出されてきたわけです。

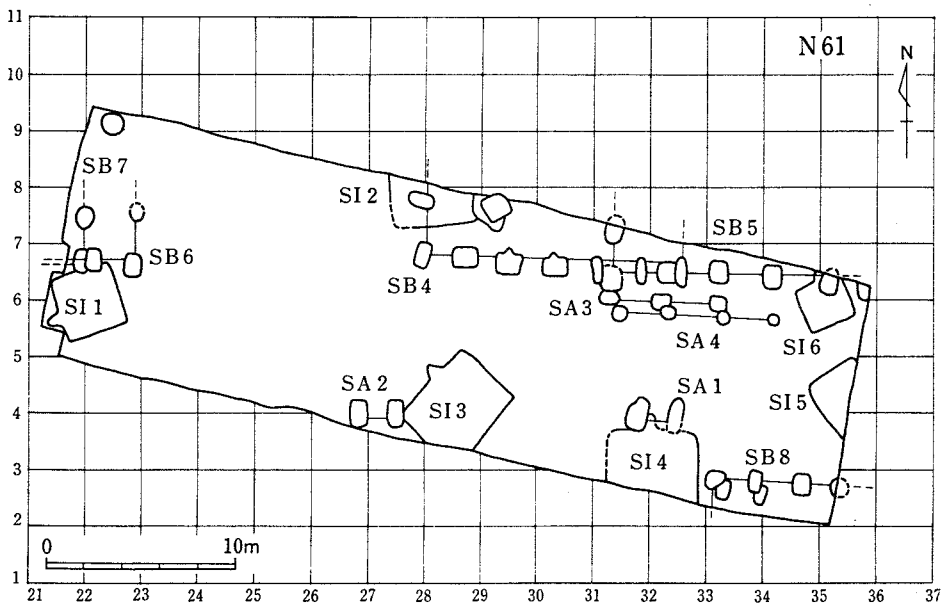
そこで、まず国庁とはどのようなものか、近江（滋賀）・伯耆（鳥取）・下野（栃木）などで、発掘調査によってその姿を明らかにしているものをみますと、いずれも正殿と呼ばれる建物を中心に、その両側に南北に長い脇殿を配し、西脇殿・正殿・東脇殿によって構成され、正殿の南に広場を持つコの字に配された建物群を基本としています。場合によっては正殿の前に前殿や、後ろに後殿を持つものもあります。それぞれの建物の正確な用途についてはあまり分かっておりませんが、あえて想像をたくましくすると、両脇殿には有力官人が、正殿には都から赴いた国司の長官が座し、正月などに中央の広場に訪れる各郡の役人の挨拶を受ける朝儀の場だったかも知れません。

国衙について、国庁より分っていないのですが文献などによりますと、税所・調所・朝集所・健児所・国掌所・田文所・公文所・学館・倉などが、国府に伴う建物ないし部署としてみられ、このうちのいくつかは国庁の周りに配されていたものと考えられます。

今回見つかったものは、コの字形に配されてませんので、残念ながら国庁ではなかったようですが、国衙のこれらの部署の一部であった可能性は大きいといえます。知事室や、議会内には入れなかったようですが、県庁のビルのなかには入れたと言って過言ではないでしょう。ただ、新聞記事にも出てきましたが、今回の調査地区で出土した瓦は、国庁推定地内でこれまでに見つかった瓦の中では古いものに属し、瓦を使った古い建物は、コの字形に配す建物群ができる前の国庁ではないかとか、国府より先につくらたとされる多磨郡衙ではないかという意見も聞かれます。これらについては、あるいは出土遺物を整理するうちに、その建物の名称を墨書きした土器などが見つかって解明されるかも知れません。

また、ここで見つかった正体不明のもの（図面ではＳＡ＝柵としてあります）に、深さ２ｍ近くを計る柱を据えた穴がありますが、通常の建物は１ｍもあれば深い方で、ローム層の下の礫層まで掘り込む意味は、いかなるものか明かとなっていません。あるいはこれが、ここで見つかった建物群の性格を明かにするうえで、なんらかの意味を持つものかも知れません。

いずれにしても、今後の調査の進展が期待されます。（仮称府中宮町賃貸マンション地区の調査から　荒井）



調査地区遺構配置図

あれこれ

星空散歩―オリオン座のはなし―

前回までの“あれこれ”は、植物をテーマにしたお話でしたが、今回からはテーマを星に変えたいと思います。その第１回目として、今回は冬の代表的な星座オリオン座のお話をすることにします。

オリオン座は、２個の１等星リゲル・ベテルギウスを含んだ14個の星からできています。日本ではリゲルのことを、その色が青白いところから源氏星、ベテルギウスのことをその色が赤いところから平家星と呼ぶ地方がありました。これは、その昔の源平合戦の折り、源氏・平家がそれぞれ白旗・赤旗を目印に使ったことになぞらえたといわれています。この他、オリオン座には、馬頭星雲やオリオン座大星雲など有名な星雲があります。これらを双眼鏡や望遠境で実際に見てみると、天文ファンでなくても、その迫力に圧倒されることでしょう。

ではここで少し話題を変えまして、オリオン座にまつわる神話についてお話したいと思います。ギリシャ神話では、オリオンは海の神ポセイドンの子として生まれた猟師でした。しかしオリオンは力自慢をいいことにあっちこっちで乱暴な振る舞いをしていたので、嫌われものになってしまいました。そして、大神ゼウスの妃ヘーラが遣(つか)わした大さそりに殺されてしまいました。このオリオンを殺した大さそりが、有名なさそり座です。オリオンは今でも、この大さそりを恐れてか、さそり座が西の地平線の下に沈まないと東の空に姿を見せないといわれてます。これは、オリオン座とさそり座の位置が、180度反対の所にあって同時に見ることが出来ないことから昔の人が考えついたお話です。

また、オリオンの死因については、この他にもたくさんありますが、それらについては別の機会にお話したいと思います。

ところで、このオリオン座は今の季節ですと夜の10時頃、東の空に見ることが出来ますので是非、本物をご覧になってください。きっと天空を駆(か)ける猟師オリオンの勇壮な姿が目に浮かぶことでしょう。　（K）

インフォメーション

梅見のつどい

2／19(日)～3／26(日)

市の花「梅」もいよいよ見頃。54種、約1000本が咲き誇ります。

あるむぜお　第6号
al museo　イタリア語
“博物館で”“博物館にて”の意
発行年月日　平成元年２月20日
発　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423－68－7921